

# 平仮名書字学習における教科書体 —国定第四期、第五期国語教科書を中心に—

清 水 文 博

## はじめに

現在市販されている就学前用の平仮名の練習帳、掲示用の五十音表をみると入門期用に特殊な字形の活字を使用する場合もあるが、教科書体活字やそれに類する字形の印刷文字が採用されることは多い。小学校では平仮名指導において漢字のように「字体の標準」が提示されているわけではないのであるが、小学校国語教科書写教科書に示されている平仮名の手書きの字形は、教科書体とはかけ離れていない。平仮名の教科書体は、直接的、間接的に現在の平仮名の手書き文字の学びに影響を与えている。

昭和初期に使用された国定第四期国語読本の教科書体は、それまでと大きく字形が変わったものである。そして、このときに作成された教科書体活字の字形は、戦後に引き継がれた。本稿ではこのときの平仮名教科書体の成立の経緯を整理、検討し、当時教科書体がどのように書字学習において使用されたのかをさぐることにする。筆者は以前この教科書体と書字学習の関わりについて漢字も含めた大枠について考察した<sup>1</sup>が、筆致や字形が大きく変化した平仮名教科書体の字形一覧の提示や字形分析を行っていない。本稿は特にこの新たな平仮名の教科書体の導入がなされた第四、第五期の国定国語教科書の書字学習を中心に考察することとする。

「教科書体」とは、狭義において国定第四期国語読本の巻5以降に使用された活字のかたちを指す<sup>2</sup>。当時教科書体という用語が使用されていないのではあるが、本稿では時期を限定せず国定教科書の読本文に使用されるような教育用の文字全般について「教科書体」を使用する。そしてまだ活字にはなっていなかった巻1～4を含め、四期以後の教科書体を「新教科書体」と表記する。また特に書名を提示しない場合、「三期」とは『尋常小学国語読本』および『尋常小学国語書き方手本』を指す。当時の毛筆や硬筆の書字学習は法令上「書き方」とされるほか、「書き方」と表記されるなどさまざまな表記がなされるが、引用をのぞき一般に使用されていた「書方」を使用する。

## 1 新教科書体の作成

### (1) 新教科書体の作成者と印刷

国定第四期国語読本は1933（昭和8）年から使用が開始された。国語教科書担当の監修官の1人、各務虎雄は、この読本の平仮名教科書体について解説している。各務はこの教科書体について「平仮名の用筆は、従来の読本のそれに比べると、一体にやはらかになつてゐる」とし、「その原因の主要なものは起筆や連接の部分などに特別の注意を払つたからであると思ふ。従来の平仮名は、あたかも漢字の楷書を書くやうな用筆<sup>3</sup>」であったとする。巻末の【表1】は三期から五期までの教科書体と、書方手本等の手書きの平仮名を掲載したものである<sup>4</sup>。【表1】①が三期の旧教科書体、⑤が四期の新教科書体である。どちらも種字を書いていたのは、細字やペン習字を得意とした書家の井上千圃である。各務の解説のとおり、①の文字の起筆には漢字の楷書のようなものがあり、⑤でそのような起筆はほとんど見られない。⑤は一見してそれまでの教科書文字とは異なる柔らかな印象のものである。

また各務は、新たな教科書体が平安期のものを基本とし「これを現代に、のみならず小学児童の見る平仮名に適するやうに工夫を施したのである。これは乙種の筆者を煩わしたもので、これならば書方との連絡の上からも比較的穩健になつたと考へてゐる<sup>5)</sup>」ということで、平安期の参考古典名をあげている。ここにある「乙種の筆者」とは仮名書家の高塚竹堂である。高塚は小野鶯堂に師事し、泰東書道院の審査員をつとめるなどした有力な書家である。各務はこの平仮名の新教科書体の字形が変化していることについて「新読本の方で積極的に変改を企てたことに主として起因することは勿論であるが、用筆法を改めたことから或点までは自然と導かれたものと考え。その上技術的には、従来の木版彫刻で、原紙は雁皮紙を用ゐたのに、今度のは凸版で、従つて文字の縮むことが比較的少いオイルペーパーに書いたことも、相当有力な原因になつて<sup>6)</sup>」いるとする。平仮名だけではなく巻1～4の読本にある文字は、片仮名漢字等も同じ印刷機構だった可能性が高いだろう。図書監修官の井上越によれば巻4までは「版下を書かせて直ぐそれを凸版に起こし<sup>7)</sup>」て印刷したとする。巻1～4までの文字の印象の違いは、編集側の要望によるものだけではなく版下の原紙の違い、そして印刷機構の違いが関係しているのである。

そして巻5からは「同じ版下書に書かせて之を黄楊の木に彫り、蠟型にとつて活字<sup>8)</sup>」とし、彫師は最終的に1人が担当した。この活字の字形が巻末の【表1】⑧である。これがこの後長く使用され戦後の教科書体にも影響を与えたいわゆる文部省活字である。巻4以前から、すでに同じ文字同士での字形の揺れはほとんどない仕上がりにはなっていたのであるが、活字になることによってこの揺れはなくなることになる。学習者はいつも同じかたちで学ぶことができる。また組み換えがきくため、編集効率は飛躍的に向上する。しかし、同じ文字同士での字形の揺れがなくなり、字形の変更が以前よりも容易でなくなることは、教科書体のかたちの絶対視につながるともいえる。平仮名はそもそも流動性の高い文字であり、つなげたり離したりすることの決まりは曖昧である。これが活字になることによって問題になりえない細部を教科書体どおりにしなければならないことを学習者に思わせてしまうということもあろう。

【表1】⑤の活字直前期の字形と、⑧の活字とを比べると、例えば「え」の折り返しが浅くなるなど、①からの変更が⑧の活字にも概ね引き継がれていることが見てとれよう。象徴的なものは「し」の終筆の方向である。⑤と⑧では「し」の終筆が右上に向かっていない。四期読本の教科書体は、活字になったときに字形が急に変更されたのではない。随時の字形変更は確かにあるのであるが、第一学年から一貫した字形がめざされ、それが活字に継続しているのである。また、井上越が解説していたように、四期の巻1～4の活字直前期の印刷機構は特殊なものである。前後のものとは分けて考える必要がある。平仮名の新教科書体の設計には、各務虎雄などの図書監修官と高塚竹堂が多分に関わっており、その意図を酌んで井上千圃が版下を作成したのである。

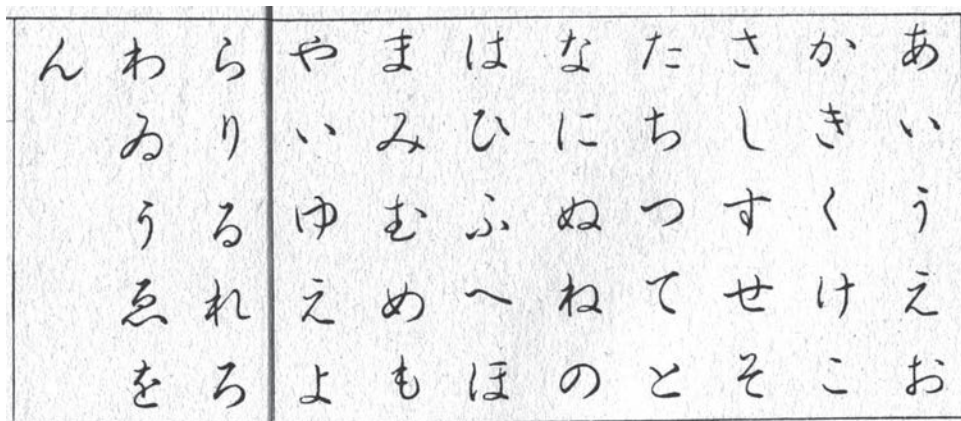
このようにして作成された平仮名の新教科書体のデザインに平安期の文字が参考にされたことには、古筆研究の推進や、一般社会の書道振興が影響していると考えられる。書を学ぶ者が平安期の古筆を鮮明な印刷で見られるようになったのは出版、印刷技術の向上によるものであり、古筆の学書振興を後押しした。東京女子高等師範学校教授の尾上柴舟は、国語教育に関する著述において、新教科書体と同時期に書かれた書方教科書の文字を「このごろ出来たのは、皆理想を平安期に置いて書いたのであります<sup>9)</sup>」とのべ、中等学校以降も平安期の仮名古筆を継続して研究するべきであるとする。実際、甲種手本を執筆した鈴木翠軒は文字ごとにどの古筆を参考にしたかを記しており、平仮名では寸松庵色紙のほか、継色紙など多様な古典を参考にしている<sup>10)</sup>。漢字も含めた「調和体」を推進した尾上の理論は特に中等学校の習字教員に絶大な影響力を有してもいたこともあり<sup>11)</sup>、尾上の古筆研究は平安期を重視した教科書体の字形の導入にも影響を与えていたと考えられる。平安期の仮名古筆は仮名の書として他の時代の追隨を許さない高い評価を得ていることは確かであるが、平安期の仮名が近代以降、特に硬筆の筆記に適しているかどうかについては異論があるところであろうし、後述するように児童が学ぶ文字に平安期の字形を多分に取り入れることについての疑問の声もあったのである。

## (2) 平仮名教科書体への高塚竹堂の関わり

各務の平仮名教科書体解説によれば、新教科書体のうち「い え し す と ふ み む ゆ る ゑ を」等が三期から特に字形が変化したものである<sup>12)</sup>。これらは、従来の教科書体が古筆には例がない字

形であったものを特に大きく訂正したものである。各務の三期教科書体への書学の立場からの「不適切なもの」についての解説を簡条書きでまとめたものは以下の通りである。古筆名は現在の一般的な呼称に直している。

- ・「い」は左が大きく右が小さいが、古筆にこのようなものはない。高野切や関戸本古今集、内大臣家歌合などは右のほうが大きい。「以」の草体であるので当然のことである。
- ・「え」は「元」の草体に近いが、古筆には例がない。粘葉本和漢朗詠集、高野切、筋切等は左に引く斜線は殆どない。
- ・「し」は鉤針そのものであるが、古筆には例がない。卷子本和漢朗詠集は終筆が右に曲がっているが、上に向かってはいない。粘葉本和漢朗詠集では曲がるどころか直線である。
- ・「す」「む」の結びで、結びの前と後で同じ線の上を通っているが、古筆には例がない。「す」は「寸」の草体であるため、このようなことは書学の上から好ましくない。「む」など秋萩帖や筋切では紐でも巻きつけるように縦線と交錯しており「武」の草体に近い。
- ・「と」の一筆目は、垂直になっているが、古筆にあまり例がない。
- ・「ふ」の一つめの点から二筆目の連結が不自然な切り込みをしている。
- ・「み」「ゐ」の最初の起筆が漢字の横画のようになっている。
- ・「ゆ」の縦から円に移るところが相当上のほうまで逆行しているが、古筆にはあまり見ない。
- ・「ゑ」の上部が「る」と同じ気持ちで書かれているが、あれほど深く切り込んだものは古筆にない。
- ・「を」は1筆目に交わる斜線が左下に伸びているため、次の縦線が非常に深く切り込んでいるが、古筆には例がない<sup>13</sup>。



【図1】『小学国語読本 三』の五十音表

活字ではないため、これらの教科書体には字形の揺れがあり、ここに挙げた特徴を【表1】①が必ずしも有しているわけではないが、これをふまえて【表1】⑤の教科書体が、先に述べた特殊な印刷機構により手書きで作成されたのである。一例をあげれば、①で「と」の1筆目が垂直であったことは、⑤で解消されていることが確かめられる。【表1】⑤において各務の指摘する特に変化したこの12文字には●印を付した。

新教科書体の字形には随時修正が加えられている。各務は「例へば「よ」などは、巻三の時と巻四の時とでは多少変つてゐるはずである。今度出る巻でも、それゝ修正を加へられてゆくものがあらうと思ふ<sup>14</sup>」と述べている。巻3には平仮名の五十音表【図1】およびいろは歌が掲載されている。【図1】と【表1】⑤にある巻4の「よ」を比べると、両者の違いは分かりにくい。が本文中の文字とも併せて比較すると、2筆目の入筆の方向が修正されている。また、各務の解説にはないが、「ゆ」の縦から右上に向かうときの筆運びの変更は大きなものであらう。【図1】の巻3の五十音表では逆行する部分で筆を離しているが、【表1】



⑤の巻4ではそれが解消されている。これは、漢字でいうところの画数の変更となるもので学びにくいものとしてすぐに訂正されたものと推測される。

第二学年用の国語教科書の使用開始と同時期の1934(昭和9)年7月には、東京高等師範学校講堂にて文部省主催の第二回書道講習会(公式には習字講習会)が開催されている。このとき高塚竹堂は、鈴木翠軒、田代秋鶴、尾上柴舟、瀧精一、比田井天来とともに講習を担当している。高塚は中等学校の習字教育を効果的に教えるためには、小学校手本の研究が必要であるとし、「新小学校二年に出る仮名文字は主として古名筆に芸術的根拠を以て書いてあります。そして、今私は代表的な古筆の共通に持つ筆の味ひ、形のとり方等につきて比較対照して表を作り、その標準となるものと思ひ仮名单体を集めて見たのであります<sup>15)</sup>」とのべ、仮名单体の集字資料を配布している。資料は巻末に【図3】【図4】として掲載した。上段は高塚作成の「標準となるもの」と考えられる。

高塚が講習会で配布した資料を見てまず気づかされるのは、右端にある古典名が、各務虎雄が教科書体の参考にしたという古筆の種類<sup>16)</sup>と掲載順を含め同一である(ただし高塚のものは高野切を第一種と第二種に分けているが、各務は分けていない。)ことである。つまり、高塚竹堂が講習会で使用した資料は、乙種教科書の毛筆手本の揮毫のみならず、仮名教科書体作成にも関わった、あるいはそれらの成果をもって作成された可能性があるものなのである。高塚の当日の解説は字母や筆使いの注意点に関するものが主であり、それぞれの文字にどの古典が参考にされたのかというものではなかったようである<sup>17)</sup>。高塚の当日の説明が各務の解説と合致しているものとして、「い」があげられる。高塚は「従来の小学校教科書には第一画大きく第二画小さいが、古帖には正反対にて第一画小さく第二画大きくなつてゐるが急に改めるのも弊害あるから、その差を少くしたのであります」とする。【表1】④「い」は印刷が不鮮明であるが、高塚が書いた⑦、そして新教科書体の⑤はともに、「い」の1筆目と2筆目の長さがほぼ同じとなっていることが確かめられよう。また、当日の解説からは、実際に高塚が仮名を書くときに書かれたルールがみてとれるものがある。高塚は「う」の右端をそろえろとする。【表1】③はこれとほぼ同時期に書かれた高塚の平仮名单体手本であり、当時の高塚のいろはの標準体といつてよいものであろう。【表1】のうち、高塚が書いた③④⑦はどれも「う」の右端がそろっており、むしろ1筆目右端のほうが右にあるものもある。

このように高塚が関わり、平安期の古筆が参考とされて新たな教科書体が作成された。概ね高塚の意は酌んだようであるが、「え」「ゑ」等は、従来の読本との関連を重視しなければならないため高塚の理想通りにならなかった<sup>18)</sup>。各務が粘葉本和漢朗詠集等に「左に引く斜線は殆どない」と解説していたことを勘案すると、新教科書体の「え」は従来の読本との関係もあり、折衷案的に採用されたと思われる。ここで、井上が教科書以外に書いた平仮名を見てみよう。巻末に掲載した【図5】は1932(昭和7)年1月発行(印刷は前年12月)のものである。書写時期が明らかではないが、新教科書体作成の直前に発行された硬筆手本である。ここには、いろは歌を書く際に気をつけるポイントが記されている。「と」の1筆目が垂直であるなど三期の教科書体と適合するものがある一方、「う」の字形が細長いなど、高塚の字形に近いものもあることがみてとれる。

国定第三期本までは、いくつかの種類の発行がありながらも一貫して国語書方の毛筆文字を書いてきたのは日高秩父である。【表1】では②が日高の文字である。【表1】①②を見ると、「き」の3筆目が長く直線的であるなど、両者の字形の特徴が類似しているものは多い。井上千圃は、四期の編集方針に応じてこれを急に変えて書かねばならなくなった。この表からは字形や書風を変化させて書いた井上の器用さを読み取ることができると同時に、字形を修正して書くことが難しいことであったこともうかがわれる。事実、図書監修官の意に満たなかった字は多くあるようである。特に「と」「る」「ゐ」「ゆ」「し」は、井上の書き癖により図書監修官の希望通りにならなかったとされる<sup>19)</sup>。平仮名は日常的にも、また版下の作成上でも使用頻度が高いものであり、どうしてもそれまでに書いてきた字形が反映されるのであろう。

## 2 教科書体と平仮名書字学習

### (1) 児童、教師の書字規範としての教科書体

当時の児童の書字規範として、教科書以外では、中心的に考えなければならないものに板書がある。教室内で一点をみて規範を示せるものは板書であり、学習への即応性などを考えると掛図などに比べても、もっとも使用されたものであろう。各務は新教科書体の平仮名について「元来読本の字は毛筆で書かれてゐるの

であるから、そのまゝには板書できない。またこのとおり鉛筆で児童に書かせることも無理である。それはわかつてゐる。それゆゑ、児童にはもとより強ひるべきではないが、できるだけ努力を払つて、なるべく板書の際にも新読本の平仮名の書体なり用筆法なりに近からしめるやう工夫すべき<sup>20)</sup>としている。そして、そのためには甲種、乙種の書方手本についても検討しておくべきであり「特に乙種の平仮名は、書体に於ても、用筆法に於ても、新読本の平仮名の缺を補ふ上に重要な働をするものと信ずる。たゞ書方には書方としての使命があるから、手本の文字が必ずしも読本に即するやうにしてないことは、念のためご注意を促しておきたい」とのべている。各務は読本の教科書体について作成に携わったものとして、そのかたちへの自負はあったであろうが、必ずしもこれを書く文字として信奉していない。「新読本の平仮名の缺を補ふ」とあるのは、教科書体とは別に書く文字としての規範を示した毛筆手本を学ぶやうにということなのである。

文部省には当初この新教科書体の平仮名について「教授者の板書にも、鉛筆による児童の書写にも甚だしい不便があつて、これはむしろ改悪である<sup>21)</sup>」という意見が寄せられた。新教科書体の字形については、このような低い評価があった一方、後に平仮名が硬筆の手本になりうるといふような評価もなされている<sup>22)</sup>。このようにこの字形への評価はさまざまであったやうである。これには教科書体を書く文字として捉えるか、また見る文字として捉えるか、考え方が混在していることが関係しているように思われる。各務は前述のやうに必ずしも書くための文字ではない教科書体の字形や筆致で鉛筆を用いて児童に書かせることを推奨しない。しかし実際のところ読本の教科書体は、書字の見本になることは避けられない。四期では文字の習得時、五十音表をはじめとした教科書体が読本に掲載されているのであり、そこにある文字が書字の見本となるのは当然である。教科書体は教師の板書規範として参考にされたほか、児童も硬筆書字における書字規範としてこの教科書体を見ていたのである。

## (2) 国定四期国語教科書の平仮名学習

四期読本では2年生の当初から平仮名が学習される。三期では従来片仮名で単語の平仮名を提示してから平仮名を学習していたのを改め、平仮名のみを当初から掲載した。井上越はこの提出方法を「新読本の革新的方法」として解説している<sup>23)</sup>。従来なかったこの提出方法には、入門期に韻文を用いる、繰り返しを多用する、新字を提出しない課を設けるなど数々の配慮があった。井上は平仮名の提出について、特に韻文を1課から4課まで掲載することによって「平仮名訓練を学習の興味の埒外におく癖も除かれ、殊に又論理的に抽象的に文字を注入する癖も除去された<sup>24)</sup>」とする。このような方法をとると巻頭から新字が多くなるが「児童の心理に適切な文章であり、文学であるが為に、児童の学習は著しく興味的」とであるとする。はじめに多く提出される平仮名であるが、この増加は平均すると学習負担になるほどではないとも分析し、繰り返しが多くなるやう配慮している。なお、濁点を含む文字については片仮名の学習からの類推を生かした指導がなされる。井上は、文学性や文の読み、児童の心理にこだわった四期国語教科書の平仮名提出方法を解説するが、平仮名の字形については各務が解説していることもあってか、平仮名個々の書字指導の詳細にまで踏み込んだ解説をしていない。これについて現場でどのように対応しようとしていたか、またしていたかについては師範学校訓導等が出版した指導書が参考になる。

東京高等師範学校訓導の佐藤末吉は、指導書の中で新教科書体の平仮名の指導法を詳しく検討している。新読本の平仮名は「平仮名の最もすぐれた書風、書体によつて、その最高標準を示したもの<sup>25)</sup>」であると賞賛しながらも「児童に対して適当であるか否かは再考しなければならぬ問題である<sup>26)</sup>」また「読本の文字の如き自由さは子供には殆ど出来ない」など、習得時にこのような字形で書かせることは困難であるとする。また、「読本の文字は主として読ませるための文字であつて、書かせる為の手本としては他の書風に從つて差し支えないとすれば、この問題は解決する。しかし読む文字は直ちに書く文字であることが理想的で、この点は欧米諸国の印刷文字と筆記文字の相違の如く取り扱ふことは、決して利益のある仕方ではない」とし、児童に実際に書いたものを挙げながら指導法を説明し、片仮名の要領で書かせてから、次第に曲線等に習熟させる指導方法を提示している。佐藤は「読本の文字を臨本として書かせること及書き方練習の場合が多ければ次第に美しく書き得るに至る」というやうに、高学年になるにつれ徐々に習熟させようという考えである。この考え方からすれば、入門期用の平仮名教科書体が必要とも思われるが、そこには言及していない。入門期には、板書等で「片仮名の要領」、すなわち漢字の楷書のような直線的な用筆を生かした平仮名を示

す対応がなされたと考えられる。

奈良女子高等師範学校訓導の秋田喜三郎は、新たな平仮名の学習について「全文主義により文章の反復によって、自然に習得せられるやう仕組まれてゐる」としながら「準備的工作」としてのカルタ等の用意や平仮名五十音表を掲げる、反復の利用、平仮名片仮名併記の五十音表の利用、巻1を平仮名で書写させる、綴方は平仮名によって書かせるなどの工夫を列举している<sup>27</sup>。このようにして今までにない平仮名の提出方法への手当てがなされているのである。この「準備的工作」からは合科学習を主導した同校らしい環境による学習を読み取ることができよう。片仮名で平仮名の読みを掲載しない教科書を使用するにあたって、平仮名五十音表の掲示のほか、教科書に掲載された巻末五十音表を随時取り扱って指導することは、四期読本で従来以上に重視されたのである。また秋田は、平仮名の「硬筆書方」を取り立てて指導する必要性を訴えている<sup>28</sup>。低学年の児童にとっては、硬筆であったとしても、曲線を伴う平仮名の書方は難しい。この学習は、板書や教科書体等を書字規範にするほか、民間から発行された硬筆書方学習帳を使用する方法も考えられるであろう。この学習帳は、漢字指導も含めて便利なものとして特に三期のときに多く発行され、四期でも低調にはなるが、発行され続けているものである。

秋田と同じく奈良女子高等師範附属小の河野伊三郎は、指導書のなかで個々の児童が平仮名をどの程度読め、書けるかを予備調査しておく工夫を巻頭に紹介する<sup>29</sup>。河野は、秋田と同じく国語科教育を専門としていたが、書方についての著述も多く書字指導については高い見識を持っていた人物である<sup>30</sup>。書方について河野の論からは、系統を重視する傾向をうかがうことができるが、児童に応じた平仮名の指導系統の作成につながる調査を行うべきことを指導書巻頭においたことは、河野の特徴的な一面をあらわしているといえよう。河野の指導書では、板書を活用して指導する指導事例を多く提示している。小黑板をいかに利用するかなど、詳細に板書指導を解説しているのである。板書の説明にあたり「し」の方向に注意することや「ゐ」の起筆が「新趣向になり仲々むつかしい」と記されていることから、新教科書体の書風の変更にも対応しようとしていることが読み取られる。河野は巻末の平仮名表について、「学年の当初から掲示しておいて常に児童に親しませ以て児童の文字力を養成するがよい<sup>31</sup>」また掲示にあたって教師は「改正読本の新趣向に準拠して清書するを要する」ともする。【図1】の巻末五十音表を教師が拡大、清書して教室に掲示しておくべきということなのだろう<sup>32</sup>。

古筆の字形重視の新教科書体が板書や硬筆学習に困難をきたすとの苦情が文部省に寄せられていたことは前述の通りである。新教科書体への対応としては、佐藤が指導法を模索しているほか、河野の指導書には新教科書体への言及が時折登場する。ところが秋田のものにはそのような記述はほぼない。平仮名教科書体の字形は確かに変わったが、読方の書字学習中、大きな混乱を起こすほどのものではなかったという見方もできる。このように考えるとすれば【表1】を通観して変化が最も大きいのは起筆の筆押さえである。これは板書でも鉛筆でもそれほど注意される部分ではない。新教科書体で字形がかなり変わっていることは確かであるが、漢字でいうところの画数の変更はできるだけないように配慮されているのである。

最後に同時期の書方教科書の平仮名学習をみることにしたい。四期では書方における平仮名の学習時期は2年生の後期からとなっている。三期書方手本では平仮名学習が2上から始まり、読本と連動した学習であったのであるが、そこから半期後退するのである。各務虎雄はこの開始時期についてかなり検討を要したことを綴っている<sup>33</sup>。新出の文字は硬筆毛筆ともにできるだけ同一期に指導するのが書取練習への相乗効果の期待などもできるはずである。しかしながら、低学年児童にとって毛筆での平仮名の運筆は硬筆以上に難しい。2年後期の平仮名学習の開始は、読本と学習時期をできるだけ近くしながらも4、5年でなければ運筆が難しいという意見を参考にした折衷案のようなものであった。毛筆書字の芸術性を重視したといわれる四期教科書であっても両者の連携は大切にされたのである。提出された平仮名の字数は三期の90字から80字に減じ、これにより以前よりも精習の時間を確保できるようにしている。各務は平仮名の語句の選定にあたり、調査によって得られた平仮名の難易度順を考慮するなどし<sup>34</sup>、「もし困難なものが早く出る時は、それ相応の緩和策を試み<sup>35</sup>」ている。たとえば、第三教材にある「たこいか」は「た」と「こ」の関係を考慮し、「か」は若干難しいが、「い」が既習であるため全体としての負担は和らいでいるとする。各務は、語句選定について「易しい文字を組合せて比較的興味のある、纏まつた内容を有する語句で、しかも一年用や二年前期用を重複せず、また季節的・行事的にも適応したものを選んで教材とすることは、机の上で考へるほど楽



なものではな」く、「殆ど一月以上に互つて、人には知れない苦勞が絶えなかった」とする。この手本で重複した文字は18字であるが、全て2回の重複である。なお2年下には「ぬわれむゑ」は掲載されていないが、難易度の高いこの五文字と半濁音は3上に載せられた。

毛筆の手本字形との教科書体との関係について各務は、甲種「し」や乙種「え」等が読本の教科書体と異なり「読本は活字のやうに升目にうまくをさまる文字を書くことを念としたもの<sup>36)</sup>」であり、書の立場からは満足できないものであるとしながらも「なるべく読本に近よる方針はとつたつもり」であるとする。このように、新たな平仮名教科書体が導入された時期、運筆の難しい平仮名は、硬筆で学習してから毛筆で大きく書き、書字の理解を深めようとするような関係性であった。各務は硬筆と毛筆の関係性について、どちらかというとも自然と毛筆が硬筆に影響を与えるという考え方であったのである<sup>37)</sup>。

### (3) 国定第五期教科書の平仮名学習—『コトバノオケイコ』を中心に

四期で作成された活字の教科書体が低学年から使用されることとなったのは、五期教科書が使用された国民学校においてである。国民学校において読方の書字見本として教師の板書や教科書体が参考にされたと思われることは、四期のときと同じである。国民学校においては、1, 2年生用にこれまでになかった『コトバノオケイコ』が発行された。この教科書は「ことば」の多様な学習を往還して学習するためのテキストである。図書監修官の石森延男が「『ヨミカタ』と児童生活といふ二つの中間にあつて、その橋渡しの役を演じてゐる<sup>38)</sup>」と述べているように、これによって「話し方」等の指導を固定化しようとするものではない。教師用書には「つとめて指導の實際に即して問題を生かすことにつとめることが大切であり、特に煩瑣に陥るが如きは絶対に戒むべきである<sup>39)</sup>」とも記されている。

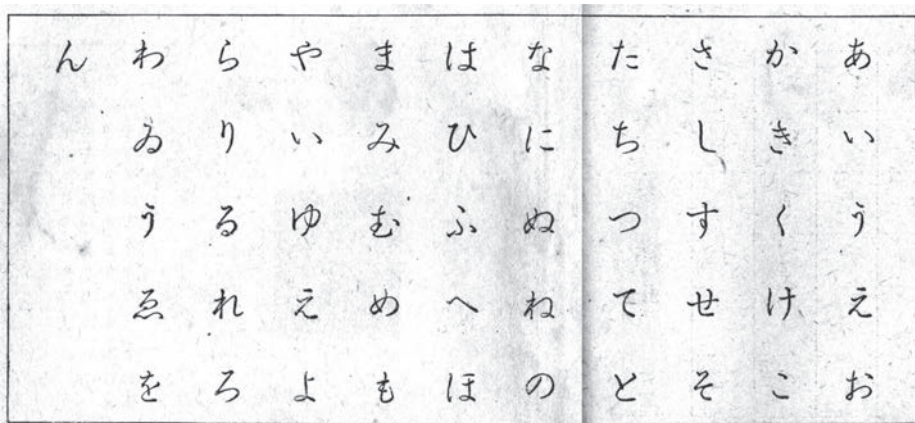
この『コトバノオケイコ』は硬筆の書字見本が国定教科書にはじめて掲載されたものである<sup>40)</sup>。書字学習にとって画期的なものであり、低学年児童にとって習得しにくい硬筆の書字技能の基礎基本を丁寧に学ぶことを可能にする。国民学校で書方は1, 2年生のみ課程表に位置づけられ「これは当然「読み方」「綴り方」等に含まれるものと考へなければならぬ<sup>41)</sup>」ものとされた。1, 2年生は特に芸能科習字と連携すべきとされているし、国語科では綴り方や視写など多様な書字活動も展開されるであろうが、日常筆記具である鉛筆の文字が掲載された『コトバノオケイコ』を使用した書字活動は書方学習の中心になったと考えられる。

平仮名の提出時期は、従来2年生から開始だった平仮名学習を1年後期の中盤（教師用書では11月）から開始することとなり従前よりさらに早まっている。ではここでどのように書字指導が行なわれるかをみることにする。はじめは、『ヨミカタ』で学習する片仮名漢字交じりの「コモリウタ」が『コトバノオケイコ』に平仮名漢字交じりで掲載される。教師用書にはこの指導法が次のように記されている。

まづ(二)の如く書く文字を中心として指導し、(一)に提出されたその他のヒラガナは読みかただけに止めておく。毎課このやうにして書くことを指導し、全体に及ぼして行く。「里へ行った」の如く、転呼音及び促音の文字を最初に指導するのは負担が重いやうであるが、転呼音や促音はカタカナで既に指導し終つてゐるから、ここではヒラガナに置換へるに過ぎない。即ち専ら文字を指導することを要点とする。ヒラガナは字形が困難であるから、書き方は特に字形・筆順に注意して指導する<sup>42)</sup>。(傍線引用者)

引用部の(二)とは『コトバノオケイコ』に手書きで掲載された「あの山こえて、里へ行った。」のことである。(一)は『コトバノオケイコ』に教科書体で提示されたこの課の本文である。傍線部からは、『コトバノオケイコ』において書字の難易度の高い平仮名の指導に力がかかっているかが読み取られよう。この課の本文は「ねんねんころりよ」からはじまるが、ここで提出された平仮名「あのこえてへつた」の8字に「ね」「よ」などの結びがある文字がないことは書字の難易度への配慮であろう。このようにして順次書字の学習が進められながら、四期のときと同じく、片仮名の既習事項から類推させることを取り入れている。ここには硬筆の書字見本が示され、点線の上をなぞり、文字が3回書けるようになっている。3回なぞり書きをし平仮名書字が習得できるわけではなく、筆記帳等に反復して練習されるべきものである。この教科書は、これまでになかったものであることもあり、児童の学習負担にならないように配慮されているのである。

『コトバノオケイコ』の書字見本は、鉛筆で書写されたものであり田邊古邨が担当したといわれている<sup>43)</sup>。



【図2】『コトバノオケイコ 二』の五十音表

国民科国語、低学年の教師用書には「鉛筆による書き方指導上の注意」として姿勢執筆等が示されてもいる。当時低学年ではペンが用いられることはあまりなかった<sup>44</sup>とはいえ、ペンやクレヨン等などではなく、鉛筆を中心に書字指導がなされるべきことが示されたといっていよう<sup>45</sup>。五期以前に民間から発行された硬筆練習帖は、鉛筆による見本の製版や印刷の難しさによるものが関係しているとも思われるが、鉛筆ではなくペンで手本を書いたものが多かった<sup>46</sup>。鉛筆が筆記具として国定教科書に提示され、毛筆的な鉛筆の書字規範が示されたことは、その後の影響などを考えても、書写書道教育史上重要な意味をもつものである。国民科国語のテキストとして、この毛筆的な硬筆文字は、新教科書体に近い字形となるように執筆されたはずである。管見では田邊が硬筆の文字を書くときに教科書体をどの程度参考にしたかの記述をみることができないが、田邊は高塚竹堂に師事しており、文検の受験も高塚のすすめによるものであった<sup>47</sup>。高塚は芸能科習字教科書の編集委員でもあり、前回から引き続き国定教科書に携わったことになる。田邊が書いた字形を見ると、【表1】⑩「ま」の結びは教科書体と異なったかたちを採用するなど、手書きとしての幅が示されつつ、「え」の折れ返しが浅いなど、教科書体への配慮があると思われるものは多い。

『コトバノオケイコ 二』には、巻末に平仮名の五十音表【図2】と、15課「お正月」にいろは歌が掲載されており『ヨミカタ』には掲載されない。巻末の五十音表は、五十音の指導のほか、読みや書きの習得のために随時参照されるものであり、書字の見本としても想定されていたと考えられるものである。しかし、『コトバノオケイコ 二』五十音表の活字は大きいものではない。四期では【図2】のように五十音表は、本文とあわせて字粒が大きかったものである。三期『尋常小学読本』では本文よりも特に大きいものが掲載されていた<sup>48</sup>。『コトバノオケイコ 二』にはこのほか平仮名一覧を提示したものとしていろは歌があり、ここに低学年用の少し大きな活字が使用されている。『ヨミカタ 二』の15課にも使用されているこの大きさの活字は、国民学校で新たに登場したものである。教師用書によればこのいろは歌は、読みのための教材である。しかしこの活字は文字が大きいため巻末の五十音表よりも詳細に文字の字形を確かめることができる。1年生後期の国語教科書における平仮名一覧の掲載は五十音表といろは歌のみであり、児童や教師には小さな活字の五十音表のほか、大きな活字のいろは歌も書字見本として参考にされたのではないだろうか。【表1】⑨は、詳細にみると【図2】の小さな活字よりも抑揚が強調されており、字形が若干異なっているものもある。たとえば「い」の一筆目を長くしないことは、古筆重視の新教科書体の特徴であったが、大きな活字では長くなっている。この大きな活字は、拡大にともなうと思われる抑揚の強調と若干の字形変更により、従来の文部省活字が持っていた平安期の古筆の味わいが減少していると感じられるものである。なお【表1】⑧は【図2】と同様の小活字であるが、図表の枠にあわせる関係上拡大したものである。

その後の国民科国語教科書、『ことばのおけいこ 三』には鉛筆【表1】⑩、芸能科習字教科書の『てほん』には毛筆によるいろは歌【表1】⑪が掲載されている。芸能科習字では2年当初から毛筆で平仮名が学ばれる。四期の毛筆書方よりも開始が少し早まっているが、硬筆で平仮名清音の字形を提出した後に毛筆で学習する



のは従前と同様である。この文字を書いたのは、四期で甲種教科書を揮毫した丹羽海鶴門の鈴木翠軒と同門である井上桂園である<sup>49</sup>。これも四期のときと同じく比較的用筆の単純かつ基本的なものから提出し、困難な平仮名を後に出している。四期と異なる試みとしては、「あけをねむゑ」という教材をおき、類型文字の用筆の学習や筆使いが困難な文字を提出している<sup>50</sup>ことと、巻末にいろは歌を掲載していることである。

四期では、教科書体は書字の規範となり、教師の板書でも参考にされた。読本の教科書体がもつ書字の規範性には大きいものがあつたが、五期では入門期から鉛筆の見本が示されるという革新がなされ、教科書体が持っていた規範性は若干低下した。国民学校では発達段階が四期に分けられるが、このうち第一期となる1, 2年生において鉛筆の書方が国語科に位置づけられたのである。そして、それと連携するものとして芸能科習字の学習があつた。書字規範となつた3種の文字、すなわち教科書体、鉛筆の文字、毛筆の文字には、全て本文に加え平仮名一覧の提示がなされている。このように多様な平仮名の書字規範が低学年に登場することは、これまでになつたことであり、学習者に平仮名の字形だけではなく文字の表現の幅の広さを感じさせることや、提出が早められた平仮名書字を習得しやすくする効果があつたと考えられる。

## おわりに

本稿ではまず、平安期の古筆の字形を取り入れた平仮名新教科書体について各務虎雄の解説を参照しながら、高塚竹堂の教科書体への関わりについて検討した。教科書体の字形変更は低学年から行われたため、活字であるなしにかかわらず国定第四期以降の教科書体を大きく新教科書体と括ることとした。巻5以上の新教科書体は、いわゆる文部省活字であり、その後の教科書体に大きな影響をあたえている。本稿ではこの活字の成立過程における手書きとの関わりに着目した。高塚が文部省主催の書道講習会で配布した手書き文字の資料は、各務の教科書体解説と合致するものであり、高塚が執筆した乙種手本だけではなく、教科書体作成に関わつたとうかがわれるものであつた。

昭和初期、平仮名の教科書体は実質上書字の規範となっており、児童の平仮名指導、また板書の参考としてその形に着目されることがあつた。平仮名書字の学習系統としては、国定第四期、第五期ともに教科書体が参照され平仮名の字形を硬筆で一通り学習してから毛筆で平仮名を書く方法がとられている。国民学校において平仮名の入門期の書字規範として硬筆文字が使用され、教科書体、鉛筆、毛筆で本文以外に全て平仮名一覧が掲載されるなど、多様な書字規範が提示されたことは特筆される。入門期にはその中心的な教材として『コトバノオケイコ』があつたことに着目した。

はじめにのべたとおり、現在、平仮名も漢字と同じように教科書体やそれに類する印刷文字が字形の規範となることは多い。本稿でとりあげたような、手本の執筆者が密接に作成と連携する教科書体の作成過程は、横書きへの対応についてなど当時と異なる課題を考慮しながら参考にすることができるものであろう。平安期の仮名文字字形が教科書体に取り入れられたことについて書字学習以外の枠組からの評価がどのようなものであつたか等の検討については今後の課題としたい。

<sup>1</sup> 拙稿「昭和初期の書字学習と書方教科書—教科書体を起点として—」『書写書道教育研究』32号、全国大学書写書道教育学会、2018、1～10ページ。

<sup>2</sup> 板倉雅宣『教科書体変遷史』朗文堂、2003、8ページ。このような用語のほか、戦後も含めた教科書体の変遷について詳しく解説されている。

<sup>3</sup> 各務虎雄「新読本の平仮名」『教育研究』初等教育研究会、428号、1934、563ページ。

<sup>4</sup> この表は五十音表等から掲載したものと、本文から集字したものがある。本文から集字したものは、一覧として見られる目的で作成されてはいない。適宜文字の大きさを変更したものがある。⑥⑦には「せ」「て」の掲載がなかったため「ぜ」「で」を掲載した。

<sup>5</sup> 同前、564ページ。

<sup>6</sup> 同前、563ページ。

<sup>7</sup> 井上超「小学国語読本巻5の編纂趣旨及び其の取り扱ひに就て」『信濃教育』586号、信濃教育会、1935、33ページ。

<sup>8</sup> 同前, 34ページ。

<sup>9</sup> 尾上八郎「仮名の書方 全」『師範大学講座 国語教育』11巻, 建文館, 1935, 10ページ。

<sup>10</sup> 拙稿「鈴木翠軒の国定教科書執筆—新興日本書道会を中心に—」『大学書道研究』10号, 2017, 39～50ページ。

<sup>11</sup> 中等学校教員になるための文検習字科の受験では, 尾上の提唱する調和体が参考にされた。

<sup>12</sup> 前掲各務「新読本の平仮名」563ページ。

<sup>13</sup> 同前, 563～564ページ。

<sup>14</sup> 同前, 565ページ。

<sup>15</sup> 「高塚竹堂先生講話梗概」『習字之友』84号, 学書会, 1934, 67ページ。『習字之友』は丹羽海鶴門の田中海庵が発行した書道雑誌である。ここで引用した解説は注17の解説文を含め, 記者がまとめたものである。

<sup>16</sup> 各務が提示した古筆とは「伝道風筆秋萩帖, 伝行成筆御物朗詠帖, 伝貫之筆高野切, 伝行成筆御物朗詠卷, 同上関戸古今集, 伝佐理筆古今集筋切, 伝俊頼筆金沢万葉集, 伝公任筆御物朗詠卷, 伝西行筆内大臣歌合など」である。「など」とはこの9種以外にも参考にしたということだろう。

<sup>17</sup> 高塚の各文字の当日解説の全文は次の通りである。これが新教科書体にもかなり影響したとみるべきである。

い…従来の小学校教科書には第一画大きく第二画小さいが, 古帖には正反対にて第一画小さく第二画大きくなつてゐるが急に改めるのも弊害あるから, その差を少くしたのであります。

ろ…第一の横画長くする弊害あり。

は…最後の結び目下へさがる癖あり。仮名にては「如何なる場合にても同一線上を再び通ることを避けたい」直角又は直角に近い結び方をすればよろしい。

ほ…傍の二横画の開きを広くする。

へ…遍の彡かㇿかどちらか字源であるといはれてゐましたが古筆によつて見ると盤の下部が字源であらうと思ひます。

と…今までは左下部拮据になる弊があつた。

ち…最後の円筆大きくなる弊あり。

り…片仮名は利のりより平仮名は利が字源であります。

ぬ…右下方が直角の三角形の中へ入れる様にしました。

る…曲筆のところ深くなつてゐたが浅くしました。

わ…第二筆, 第一筆より右へ出やすい癖があります。

よ…結び目注意すべきであります。

つ…字源は門川なりといふ説あります。

ね…右の方垂直になるやう書きました。

む…結び目は小さい方がよろしい, 最後の点は横画と同一線上か, それよりも高く打つ方よろしい。

う…右方そろへるやうにする。

の…第一筆は正方形の対角線上を通り全体正方形に収まる様に書くとよろしい。

く…は久字が字源でありますから最後は右へ出ること。

や…第二筆右上がりにならぬ様にする。

け…第二画平に造り, 左右対向せしむ。

さ…字源左により第二画長くせず, 右へ曲がつてゐる形にしました。

み…ひ…手先でくるとかへす癖のつき易い文字であるから注意すべきであります。

す…さの心持で書くとよい結び目が出来ます。注意すべきであります。

ん…无が字源である, 曲筆のところ, 手先でくねゝとなりやすい。

<sup>18</sup> 前掲各務「新読本の平仮名」564ページ。

<sup>19</sup> 同前, 564ページ。

- <sup>20</sup> 同前, 566ページ。
- <sup>21</sup> 同前, 562ページ。
- <sup>22</sup> 国語研究会「書方教育座談会記録」『国語教育』21巻9号, 1936, 113ページ。
- <sup>23</sup> 井上越「新読本巻三の編纂精神及び解説概要」『教育研究』417号, 初等教育研究会, 1934, 3～5ページ。
- <sup>24</sup> 同前, 4ページ。
- <sup>25</sup> 佐藤末吉『生活学習小学国語読本の指導 尋常科用 巻3』明治図書, 1935, 93ページ。
- <sup>26</sup> 同前, 95ページ。
- <sup>27</sup> 秋田喜三郎『小学国語読本指導書 尋常科用 巻3』明治図書, 1935, 8～9ページ。
- <sup>28</sup> 秋田喜三郎『指導過程実践読方教育』明治図書, 1938, 113ページ。
- <sup>29</sup> 河野伊三郎『小学国語読本指導精案 尋常科用 巻3』東洋図書, 1934, 1～6ページ。
- <sup>30</sup> 拙稿「奈良女子高等師範学校附属小学校における書方の実践—木下竹次の「学習法」を中心として—」『書写書道教育研究』28号, 2013, 11～20ページ。
- <sup>31</sup> 同前, 409ページ。
- <sup>32</sup> 河野は, 「新趣向による書体」の掲示用の五十音表, いろは歌, とりな歌を指導書の付録としている。
- <sup>33</sup> 各務虎雄「小学書方手本第二学年下の編纂要旨」『教育研究』424号, 初等教育研究会, 1934, 24～34ページ。
- <sup>34</sup> 難易度順は「(1)いこくへし (2)とりてそつん (3)とりらるう (4)にたかけせの (5)さきも(6)よはほま (7)やすなふ (8)わみお (9)めあゆ (10)ぬねゐひえ (11)をむゑ」の11段階である。
- <sup>35</sup> 前掲各務「小学書方手本第二学年下の編纂要旨」31ページ。
- <sup>36</sup> 同前, 32ページ。
- <sup>37</sup> 前掲, 拙稿「昭和初期の書字学習と書方教科書—教科書体を起点として—」7ページ。
- <sup>38</sup> 石森延男「国民科国語『ヨミカタ』編纂趣旨(二)」『国民学校教科書編纂趣旨解説』日本放送協会, 1941, 34ページ。
- <sup>39</sup> 文部省『ヨミカタ 教師用 一』1941, 51ページ。
- <sup>40</sup> 書字の学習方法を分析的に考察した先行研究として鈴木慶子「国定第5期教科書「コトバノオケイコ」の考察-1-その書写教科書的側面(巻1・2を中心に)」(『都留文科大学研究紀要』37号, 1992, 150～137ページ)がある。
- <sup>41</sup> 井上越「国民科に就いて」『文部省国民学校教則案説明及解説』日本放送協会, 1940, 41ページ。ここでは「読み方」のほか「綴り方」への言及があるが, 同書掲載の「国民学校教則案説明要領(草案)」では書方は「「読み方」の中に全く包括される」ものであるとされる。
- <sup>42</sup> 文部省『ヨミカタ 教師用 二』1941, 59ページ。
- <sup>43</sup> 加藤達成監修『書写・書道教育史資料 第2巻 教科書史』東京法令, 1984, 390ページ。巻頭の座談会でも『コトバノオケイコ』と筆者について触れられている。
- <sup>44</sup> 硬筆指導について研究していた水戸部寅松は, 五年生からペンを使用させるべきであるという意見であった。(水戸部寅松『硬筆書法及教授之実際』目黒書店, 1922。)
- <sup>45</sup> 国民学校教科書の作成にあたり, 編集局長をつとめた井上越は『コトバノオケイコ』について「ことばというものの指導から「話すこと」の指導および「書くこと」—特に鉛筆による硬筆習字をはじめて採用—の手がかりにすることを期した」(井上越, 古田東朔編『国定教科書編集二十五年』武蔵野書院, 1984, 62～63ページ)と回想する。「鉛筆」による書字学習に力を入れた編纂がうかがわれる記述である。
- <sup>46</sup> これよりも少し前に台湾総督府から発行された国語書き方, 硬筆書き方の練習帖には鉛筆で書いたものとペンで書いたものがある。
- <sup>47</sup> 田邊古邨先生顕彰委員会編『田邊古邨全集 第八巻 作品, 書簡選, 余録』書道一元会, 427ページ。
- <sup>48</sup> 文部省『尋常小学読本 巻三』東京書籍, 1917, 26～27ページ。
- <sup>49</sup> 芸能科習字教科書は, 図書監修官の角南元一のほか, 書道専門家の田代秋鶴, 石橋犀水, 高塚竹堂が編集を担当した。井上桂園の書く文字の字形に彼らがどの程度関わったかの詳細は不明である。
- <sup>50</sup> 石橋犀水『国民書道十講』学習社, 1943, 155～156ページ。この教材には対応する類型文字(あ…



の、め け…に、ほ、は を…と ね…わ、れ、よ、ま む…す ゑ…る、ろ) があることが解説されている。「む」「ゑ」は特に用筆と結体が困難なものとしての掲載でもある。

#### 図版出典

【図1】文部省『小学国語読本 巻三』1934。(『復刻 尋常科用小学国語読本』ノーベル書房, 1981。)

【図2】文部省『コトバノオケイコ 二』日本書籍, 1941。

【図3】【図4】『習字之友』84号, 学書会, 1934。

【図5】『ペンと毛筆の習字兼用 手紙の書き方』(『主婦之友』60巻1号付録) 主婦之友社, 1932。

#### 【表1】

- ①文部省『尋常小学国語読本 巻五』大阪書籍, 1935。
- ②海後宗臣, 仲新編『日本教科書大系 近代編 第27巻 習字』講談社, 1967。
- ③高塚竹堂『仮名基本帖』玉川堂, 1934。
- ④『習字之友』84号, 学書会, 1934。
- ⑤文部省『小学国語読本 巻四』1934。(『復刻 尋常科用小学国語読本』ノーベル書房, 1981。)
- ⑥海後宗臣, 仲新編『日本教科書大系 近代編 第27巻 習字』講談社, 1967。
- ⑦加藤達成監修『書写・書道教育史資料 第2巻 教科書史』東京法令, 1984。
- ⑧文部省『小学国語読本 巻五』東京書籍, 1935。
- ⑨文部省『コトバノオケイコ 二』日本書籍, 1941。
- ⑩文部省『ことばのおけいこ 三』日本書籍, 1941。
- ⑪文部省『てほん 下』日本書籍, 1941。

本研究はJSPS科研費JP16K17437の助成を受けたものです。

[illegible]

11

[illegible]



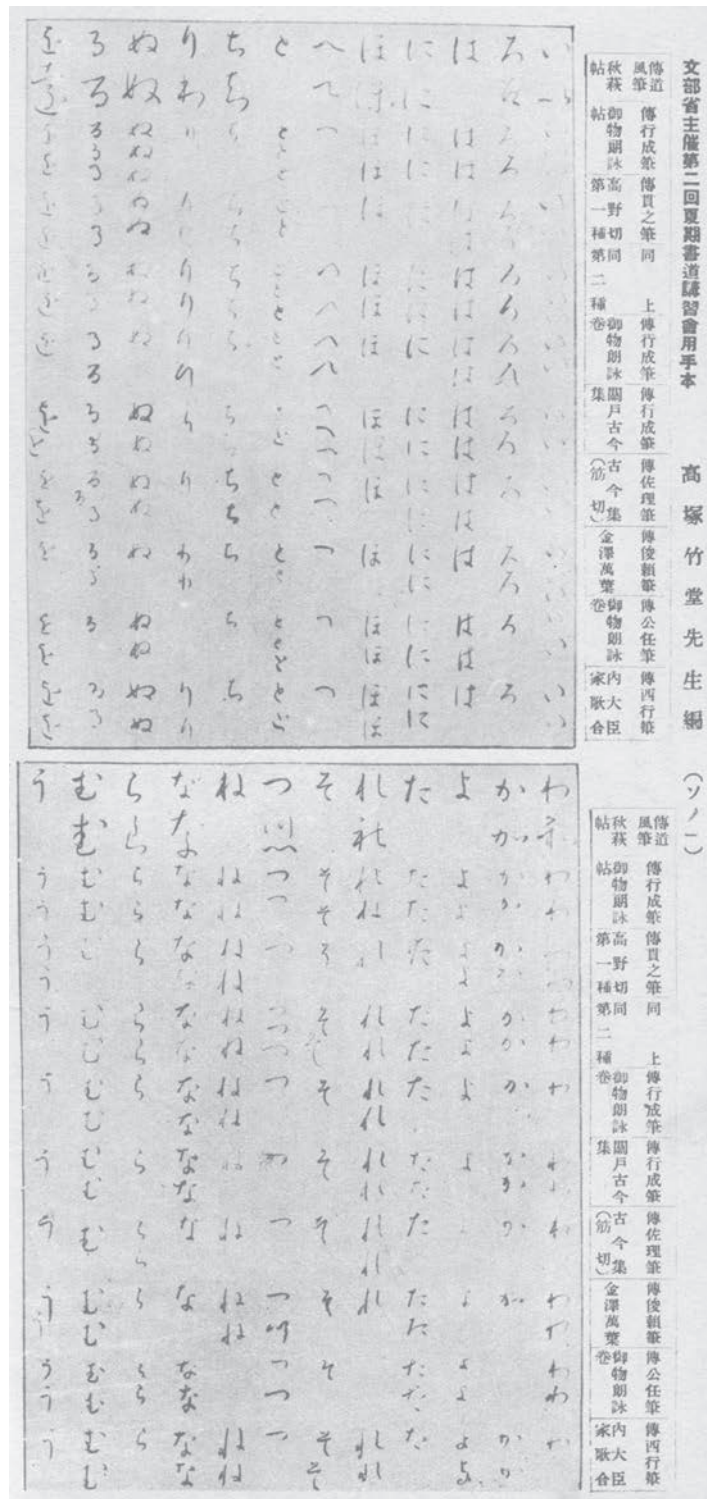
[illegible]

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る
れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ
ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ
わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ
ゐ	ゐ	ゐ	ゐ	ゐ	ゐ	ゐ	ゐ	ゐ	ゐ	ゐ
ゑ	ゑ	ゑ	ゑ	ゑ	ゑ	ゑ	ゑ	ゑ	ゑ	ゑ
を	を	を	を	を	を	を	を	を	を	を
ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん

【表1】 平仮名教科書体と手書きの比較

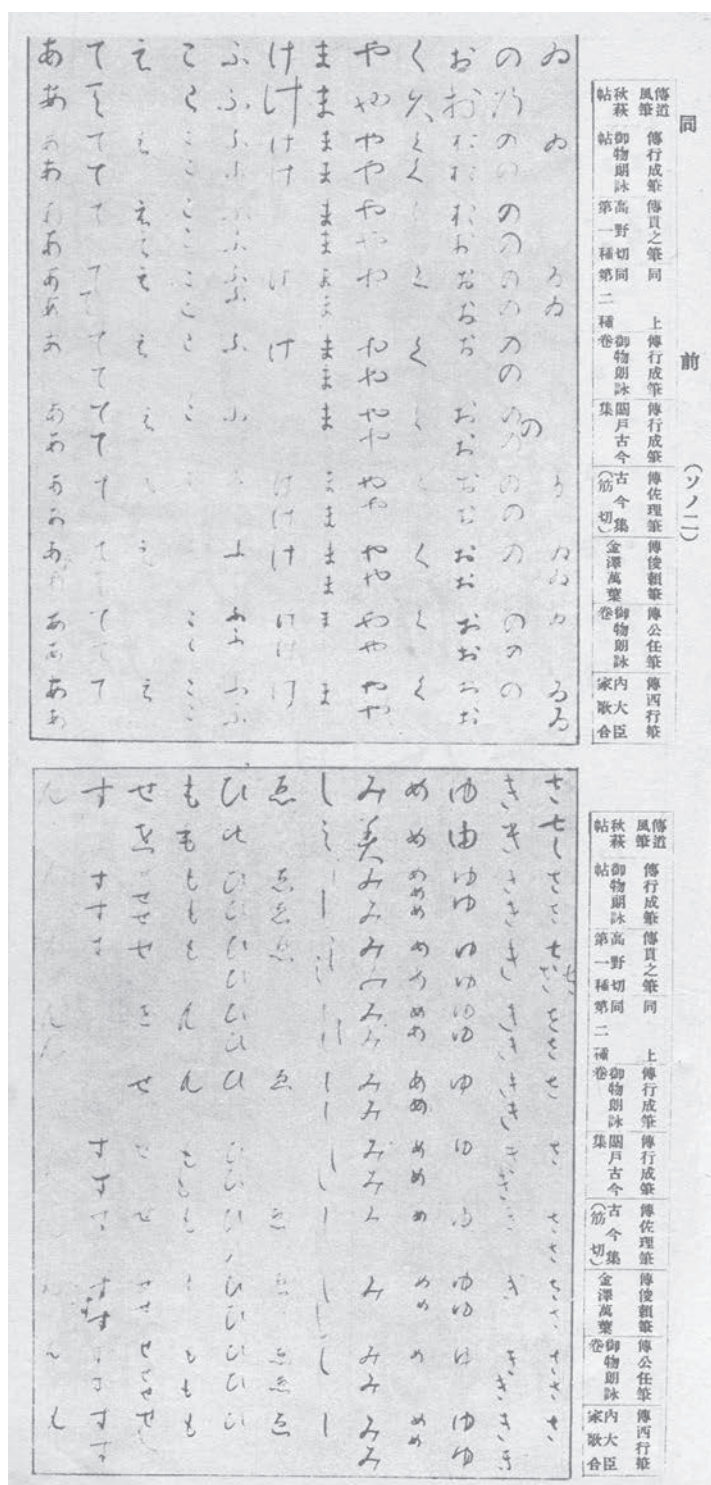
## 資料名／筆者／集字対象

- ①『尋常小学国語読本』巻五／本文
- ②『尋常小学国語書き方手本』第二学年用～第四学年用／日高秩父／本文
- ③『仮名基本帖』／高塚竹堂／とりな歌
- ④「文部省主催第二回夏季書道講習会用手本 高塚竹堂先生編」／高塚竹堂／いろは歌
- ⑤『小学国語読本』巻四／本文
- ⑥『小学書方手本』第二学年甲種上～第四学年甲種下／鈴木翠軒／本文
- ⑦『小学書方手本』第二学年乙種上～第四学年乙種下／高塚竹堂／本文
- ⑧『小学国語読本』巻五／本文
- ⑨『コトバノオケイコ』二／いろは歌
- ⑩『ことばのおけいこ』三／田邊古邨／いろは歌
- ⑪『てほん』下／井上桂園／いろは歌

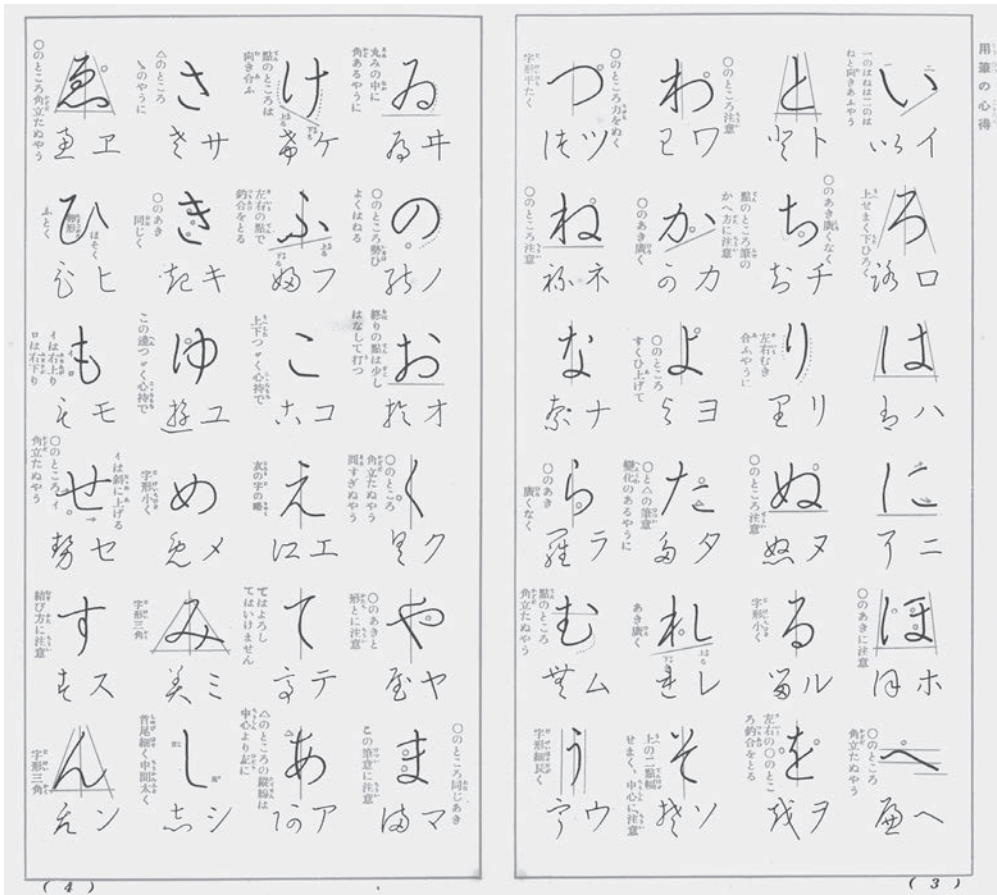


【図3】高塚竹堂の書道講習資料（1）





【図4】高塚竹堂の書道講習資料（2）



【図5】井上千圃のいろは歌